



# 決して一人ではできない 提灯づくり

## 職人たちの思いを繋ぐ

亀井 齊

聞き手・松元竣 水口未瑞希 山口竣輔（石川県立鹿西高等学校2年）

### 提灯職人

亀井齊です。出身は石川県中能登町の高島です。生年月日は昭和20年3月13日。家族は6人。息子は後継ぎになってくれると思うよ。今は勤めとるけど、仕事はできるもんで自分の元気な間にやってくれると思う。

自分がこの提灯作りの仕事を始めたきっかけは、特別にないね。自分らの子供の時代っていうのは、今と違って家の手伝い最優先でさせられてねえ、小学校の頃から提灯作ってきたから、もう自然と身についてて。

昔のホントの懐中電灯のない時、外灯のない時ってゆうのは、懐中電灯の代わりに、手に持つ提灯…あれが今の懐中電灯の代わりやね。それから、家の前に吊るのも外灯の代わり。だから、昔は各町に1軒ずつ提灯屋があっせん。自分らの若いときはね、能登部にもあつたし、滝尾地区にもあつたし、七尾にも2軒あつた。結局懐中電灯と外灯が出てきたら、やっぱり仕事が減つた。それで、みんな廃業していった。た

またま自分のところは、先代も長くやっててくれたもんで、自然と受け継ぐ形は出来た。

今の提灯の用途はほとんど祭礼やね。神社の中に飾るとか、お寺さんの中に飾るとか。後は、個人の家の前に吊るのね。提灯は神様の前を照らして神様が歩きやすいようにするためのものだからね。

商売的には…続けて提灯を吊ってくれる所があるから、やっておられるとゆう感じかな。

### こんなもん作っとる

提灯の作り方は形によっていろいろやけども、<sup>かたわく</sup>型枠というもんがあって、いろんな型枠作ればいろんな形が作れる。筒状のものはこういう形、丸いのはこういう形ってゆう型枠があるんやね。

形の種類はそんなに無いね。普通は5種類くらい。その大小はあるけども。長いもの、卵型のもの、丸いもの、それの小っちゃいものと、消防の火の用心なんかで使う細長いや



インタビューの様子



実物で説明をする亀井さん

つ。その大小が。細長いのは長くしたり短くしたり太くしたり自在に出来る。

提灯の絵とか文字とかは貼ってから描く。丸いしデコボコしとし、慣れないと難しい。できるだけきれいな線描かと駄目やし。これは一生修行やね。習字の先生みたいに一筆で書く訳じゃないから、字体を決めたら輪郭をとにかくきれいに書いて、内側を塗っていく。書くというより塗る感じ。かすれたりガサガサやと見た目やっぱ悪いやろ？

あんまり自分で新しい型枠を作ろうとは思わね。頼まれれば作るけど、やっぱり各地区の祭礼で昔から同じのを使ってる。やから、突然作ったもんを必要としてくれるかわからないし。

魚の形した提灯みたいな変わったのを作ったこともあるけど、あれは特別。ある程度まとまった数頼まれたから型も作ってしただけ。こんな変わったの1個だけ作ってとか言われたら、ちょっと無理かなって感じ。型作るだけで何万ってかかるから。お客さんがそれで納得すれば、いくらでも型作ってやるけど。それが商売になるのならそういうのも作ってもいいと思うけど実際は無理だろうね。

作っているときは無心やね。いらんこと考えとると、いいのが作れないし。

一応ね、自分では他よりは絶対きれいやと思って自信もってやってる。

お客さんが持ってこられるのを、パッと見て、これはうちで作ったもん、これはよそで作ったもんってわかる。全然作りが違うね。字とか紋の書き方でわかるね。

### 提灯の材料

材料をそろえるときは全部仕入れ先が違う。1カ所からくわけじゃない。

骨組みの材料は前は竹ひごでやとったんやけど、提灯に使うような削り方にしてくれる人がいなくなって。機械的に作るやつは、皮を全部削ってしまう。こういうのは皮が残ってないとダメなんやね。皮がついてると、多少無理がかかっても、折れることがない。だからきれいに皮を削って、節もうまい具合に削ってもらとったんやね。そういう竹ひごを作る人もいなくなって、今はピアノ線やね。その細い線に糊がつきやすい感じの和紙巻いて使う。

竹は今は問屋さん通ってくるからどこの産地の竹かわからん。前は佐渡の竹を加工したものをもらっていたんやけど、佐渡ではもうやってなくて。この辺の竹ではダメやね。竹の質と、節の間隔とか違う。破竹みたいな、細いやつを使ってる。

ロウソクについては、七尾に高澤ロウソクっていう店があるよ。そこの職人は若くてね、まだ続いていくと思うよ。

ロウソクには洋ロウソクと和ロウソクがあってね、和ロウソクは、提灯との相性もいいし、長持ちするんだよ。

洋ロウソクは、あまり長くは持たないね。あと、揺らぎが違うよ、炎の揺らぎ。それが提灯に入るといいんだよ。やっぱり提灯とロウソクは切っても切れん。今はLEDライトなんかを使うことが多いから寂しいけどね。

### 提灯作りの仕事

提灯は1年で100個から、多い時で150個くらいしか作れん。そのくらいしか出来んから普通の会社務めとった方がよっぽどお金になる。だからみんなやらなくなる。まあ年寄りの隠居仕事みたいもんや。ただこうやって家の中で出来る仕事やから、今みたいに風吹いたり雨降ったり雪降ったりしても関係なく出来る仕事やから。「ああ〜今日は仕事出来ん」とかそういうことはないからいいね。



提灯自体は、注文が来たら、何個も先に作っておいて、紙を貼っておく。描くときは、それをまとめて描く。そういう感じにするのがほとんどかな。そうしないと手間ばっかり食うし。

1個作るのにかかる時間は、お客さんが来たときに、注文から1ヶ月くらいみてほしいってゆうと。大きいものになると2ヶ月くらいかかるかな。なかには、明日欲しいってゆうて来る人もおるんやけど、それはそれで一応できるだけしてあげるようにしとる。1日で作るのは大変やね。型作って、紙貼って、絵描いて乾かす時間があるから、最終的に上に油塗るんやけど、それは短時間で乾く訳がないから。後は家に持って帰ってもらって、吊って乾かしてもら。そんな感じにしとるね。

提灯1個の寿命は使い方にもよるんやけど、大体最低でも10年。10年っていても年に1回しか下げんから、春と秋に吊ったとしても年に2回やね。やから実際に使うのは数少ない。年中下げる物じゃないもん。上手に使う人は20年くらいたってから「直して」って持ってくる人もおるし。どんな形でも大体10年は一応使えるかな？ だから修理の仕事もそんなに無い（笑）。

冬場は仕事無いし、ホントに忙しいのは祭りのシーズンの前くらい。

祭りのシーズンは1年に作る提灯の7割くらい作る。3ヶ月くらいの間で家族が誰か彼か起きてて仕事してるってゆう感じになるかな。

## 心配事

この仕事特別大変ってことはないげんけど、材料で今まで頼んでいたところの人が亡くなったら、それで仕事出来んって言われて、次それと同じ物作ってくれるとこ探さないかんし。そういう材料を作ってくれる人を確保するのが一番大変かな。

今一番この先どうなるか心配なのは、台を曲げて輪っかを作る、曲げもの師ってゆうんやけど、この近辺で数人しかいなくなって、その人もみんな70代。しかもその人たちの家に後継ぎがいない。この近辺で居なくなったらどっか県外でも行って探さないかんね。

それと曲げた台を塗らないかんね。今まで漆の手塗りでやっとなんやけど、この近辺でも塗り師さんいっぱいおったんやけど、今はいないから機械に変わって、スプレーでバーって塗るのになった。そうすと重みがない。手で塗ったもののほうが落ち着くってゆう感じかな。

和紙にしてもだんだん作る人が年とって、少なくなってきてる。これからね、職人の仕事に就く若い人が出てこんと、日本の文化ちゆうもんがだんだん無くなってくと思うよ。

提灯は集まった材料をうちらが最後に組み立てて仕上げてるちゆうものやけど、その先で作ってくれる人がいてはじめて作られるんやから。その人がいてくれんと、自分らがしたいと思ってもできんようになるしね。そうすとやっぱり代用品を作らんとならんことになる。でも機械で作ったものは味気ないね。

## 失敗と思い出

この仕事をやっている失敗してしまったことはたくさんあります。自分の勘違いで、家の紋を書き間違えるとかね。自分ではそう思い込んでやってるから、お客さん取りに来られて、「あら違う！」って言われて（笑）。そういうことはまれにありますね。

仮にツタの紋ならツタってメモして描くんやけども、白い紙貼って、同じ形のを5個ぐらい用意して、一応この人の家はこの紋やったちゆうことを考えながら描くんやけども、それがひとつずれてたりすると、もう間違ってるということに自分から気付くっていうことはまずない。もしそんな失敗したときはやり直すね、一から。やっぱり注文通りに納得のいくものを作りたいからね。

一番思い出に残っている仕事は、昭和天皇陛下が加賀屋に泊まりに来られたときに、玄関に「奉迎」と書いたものを作らせてもらいました。他にも輪島で使う提灯なんだけど、上下が輪島塗で出来ている提灯とか変わった物があるね。この提灯は輪島塗で絵を描いた物で、そういった変わったものを作ったのは、印象に残っているね。

## これから…

提灯は昔からあるもんやから、自分としては、無くしたくないと思う。やっぱり電気の明かりだけじゃ寂しいやろから。

仕事は手の動く限り続けたい。先代も、93まではやってた。力仕事じゃないから、手先と目が使えればいから。

やっぱり、これからもみんなが喜んでくれる提灯を作られればいいと思う。…それくらいしか思わんやろね。

## PROFILE

亀井 斉 かめい ひとし

昭和20年3月13日生・67歳・提灯製造・修繕販売

石川県中能登町出身。先代から提灯製造業を受け継ぐ。高校を卒業後、東京に出て3年ほど会社員として勤め、22歳のときに家の都合により地元に戻り、七尾市のミヤコ音楽堂に就職。先代の手伝いを勤めの合間にしながら製造技術を覚えた。52歳のときに家業を継ぎ、現在も提灯を作り続けている。

## ● 取材を終えての感想 ●

「名人が一人で語りかけているように名人の言葉をまとめる」という聞き書きの手法を体験できたことは非常にいい経験になると思います。私は新聞局員なので、普段は情報を詰め込み、事実・思想を伝えるという文章構成をするので、聞き書きの手法は新鮮でした。

作業については、まず取材した内容を書き起こすのが大変でした。トータル2時間ほどのインタビュー音声との格闘。今回は3人グループでの作業でしたが、それでも作業量はかなりのものでした。しかし、提灯作りに対する名人の思いを余すところ無く伝えるため、名人の言葉ひとつひとつに真剣に向き合いました。書き起こした言葉がまとまっていくにつれて、亀井さんという人間の像が見えていきました。聞き書きの文章をつくることは、「一人の人間を知り、向き合い、理解して、発信する」作業だと思いました。

機会があれば、これからも何らかの形で聞き書きに関わっていきたいと思います。(松元峻 写真:右)

初めて「聞き書き」というものをしました。名人は提灯作りの亀井さん。自分の座布団が無くても、他の人たちにはきちんと座布団に座らせてくれる心優しい方でした。おかげで、あまり緊張せずにインタビューをすることができました。

亀井さん曰く、提灯作りには、その材料を作ってくれる人々がいるからこそ、続けていける仕事だとおっしゃっていました。また、提灯にはLEDの光ではなく、淡い光のろうそくがいいともおっしゃっていました。

思えば、何を作るにしても、確かに一人では作ることができません。他人の手があってこそ物は完成するのだなと実感しました。普通に暮らしては気がつかない事に気づけた事を感謝しています。

(水口末端希 写真:左)

「名人にインタビューをして、その内容を1つの作品にまとめ上げる」

やることは大体理解していたつもりでしたが、いざやってみると、初めての経験ばかりでとても大変でした。

最初は不安なことばかりでした。名人へのインタビューでは取材する前から、「どういう質問をすればいいだろう」、「どうすれば名人との会話をスムーズに進められるだろう」など、グループの皆でたくさん悩みました。しかし、名人の方はそんな私たちの不安とは裏腹に、とても優しく丁寧に質問に答えてくださいました。また、名人はよく笑う方だったので、落ち着いて質問をすることができました。そんな名人のおかげで、取材をとともうまく進めることができました。

取材内容をまとめ上げるときに一番大変だったことは、インタビューのときに名人から伝わってきた、名人の仕事に対する熱い思いを表現することでした。先輩方からのアドバイスを参考にして、名人の話の内容ごとに分けて、名人の話し言葉や方言をそのまま使うことでうまく表現することができました。

この聞き書きを通じてとても貴重な経験をすることができたのと同時に、聞き書きは1人ではなく多くの人のアドバイスや協力があって1つの作品が出来上がると感じました。また、名人から聞いたお話、そのとき名人から伝わった熱い思いを忘れずに、私もいつか名人のように何かに熱い思いを向け、一生懸命に頑張れる人になりたいです。

(山口峻輔 写真:中央)

